

グロ・ノート

——島根県大田市五十猛町の小正月行事「五十猛のグロ」を記述する試み——

村山和之*

Guro Note:

An Attempt to Describe the Lunar New Year Event “Isotake no Guro” in Isotake-cho, Oda City, Shimane Prefecture, Japan

MURAYAMA Kazuyuki

In the evening of the 14th or the morning of the 15th of January, fire festival events such as *Sagicho* and *Tondoyaki* are held all over the country.

At this time, in the Oda, which is a fishing village in Isotake-cho, Oda City, a temporary hut called *Guro* is set up, where the New Year's god Toshitokujin or Toshitokosan is greeted. This event, called “*Isotake no Guro* or *Guro* of Isotake” which has been recognized as an important intangible folk cultural property of the country since 2005, is held to pray for a big catch and to pray for a disease-free life, and to burn *Guro* for sending him back. The god has been venerated as the ancestral spirit sublimated into god.

Based on the findings obtained from a total of four field surveys from 2018 to 2020, I will try to describe the overall picture of the event as much as possible and keep it at the latest record at the present time.

The composition of this research note is based on the description from the primary materials that I actually saw and heard in the Oda area, the origin and etymology of *Guro*, and my private consideration of similar events in other places, and the list of literature materials related to *Guro* events.

キーワード：五十猛のグロ，トンド，左義長，小正月行事，大田市，島根県

Key Words : Guro, Isotake, Sagicho, Tondo, fire festival, the Lunar New Year in Japan

はじめに

本研究ノートは、島根県大田市五十猛町の漁村：「おおだ「いそたけちょう」の名で通る大浦地区にお

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

いて、小正月行事として行われる「グロ」の大概を記述しようとするものである。

左義長、トンド焼き、鬼火焚き等の呼称で全国各地に散見される同様の行事は、歳徳神を迎えて五穀豊穡・無病息災を願う小正月特有の火祭の一つであり、毎年1月11日から15日の期間に催されているが、「グロ」の名を冠して行われている行事は、全国津々浦々探しても、ここ五十猛町大浦だけである。それゆえ「五十猛のグロ」を祭事名として、大田市の指定無形民俗文化財に、2005年には国の重要無形民俗文化財にも登録されている。

筆者は、2018年、2019年、そして2020年の各1月中旬に「五十猛のグロ」を訪ねて行事の次第を記録し、2020年12月には五十猛まちづくりセンターに赴き、コロナ禍にも拘らず参集いただいた年輩の識者たちに古きグロの記憶を尋ねることができた。

しかし、2021年1月のグロは、当時同市から一人の感染者も出ていなかったが新型コロナウイルス感染症の予防措置として実施準備が始まる11月には中止が決ってしまった。

「グロがたたない年は一年だってなかった」と聞かせてくれた海塚セツ氏にとっては、大浦に嫁いできて67年目、91歳にして、グロのない初めての小正月になってしまった。毎年恒例のグロを当たり前のように楽しみにしてきた大浦地区の老若男女の誰にとっても、歴史に残る異例中の異例な出来事が起きてしまった。大漁をグロで祈れないなんて、未曾有の試練に違いない。

だからこそこのノートでは、計4回分の見聞成果と収集した文献資料を整理し、2020年時点までの「五十猛のグロ」の実像を、可能な限り記し残しておきたい。

1. 調査地について

1-1. 大浦地区とは

鳥根県大田市は、東に出雲市、西に江津市が位置し、北に日本海、南に三瓶山を臨む、人口3万2千人強の地方自治体である（地図1）。

調査地となる大田市五十猛町（人口1,250人）は、面積が333.16m²、大田市内における位置は、東が静間町、西が仁摩町宅野、南は大屋町、北が日本海に面しており、おおうら大浦、かにわ嘉庭、じとうじょ地頭所、みなと湊、のぼい野梅、はた畑井、たんなんみ丹波、あかい赤井、かしょ嘉塩の九つの字からなる（林1998, 26）。

考古学の功績により、縄文時代～古墳時代においても人々が生活していた確証が得られている、ここ五十猛の名称は、須佐之男命の御子で日本全土に植



地図1 大田市の中の五十猛の位置



地図2 大浦地区の概図

林の業を起こしたと伝えられる^{いたけるのみこと}五十猛命に由来する五十猛（イタケル）が転じてイソタケと呼ばれるようになったと言われている。風土記選定の折、磯竹村の表記で書き記されたのが聖武天皇神亀3年（726年）で、明治22年（1889年）、町村制施行によって前身となる五十猛村に改められた。その後、昭和31年（1956年）に大田市に合併し、大田市五十猛町となる。

いずれにせよイソタケという名称は、今年で1295年もの長きにわたって継承されてきた由緒正しいものである。延長3年（925年）には、五十猛神社（湊）、韓神新羅神社（大浦）が創立されている（林 1998, 75）。

大浦港は、江戸時代は石見銀山領の年貢米の積出港として栄えた。年貢米は長崎、大阪、江戸へと海路運ばれていた。明治から大正にかけては、漁港とあわせて定期汽船の寄港地としても栄えた。現在ではもっぱら漁港として機能している。

「五十猛のグロ」が行われる五十猛町大浦地区は、^{かみいちだいいち}上市第一、^{かみいちだいに}上市第二、^{かみいちだいさん}上市第三、^{たて}堅^{まち}町、^{ほんまち}本町、^{やなぎまち}柳町、^{かみやなぎまち}上柳町、^{あさひまち}朝日町、^ひ日の出、^{みょうじん}明神、^{だんち}団地（漁民団地）の計11の自治会を有し、2020年大晦日時点の総人口が723人の漁村である（地図2）。

1-2. グロの概要

五十猛のグロは、年頭にグロと呼ばれる仮屋を設けて歳徳神を迎え、一年の豊漁・無病

息災などを各自祈願して共食し歳徳神を送り出す、年中行事の中では小正月行事に含まれる行事である。

グロとは20mほどの竹の柱を中心に建造される大型で独特の仮屋の名称であり、毎年1月11日から15日まで行われる一連の行事の名称でもある。

この行事は大浦地区の漁師たちを主体に伝承され、かつては船主・網元を中心に行われてきたが、現在では「大浦グロ保存会」という世話人組が実行役を担っている。

グロの準備は、1月11日のグロ開始日の2ヶ月前から始まる。11月中旬の時化の日を選んで世話人会議を開き、準備作業日程について協議し、12月の時化の日には割り木作りなど実質的な共同作業を、新年を迎えて1月5日以降の時化の日には竹や笹を取りに行く。毎天天候で日程は変わるけれど、準備工程はほぼ同じである。

1月11日は世話人総出で「グロをたてる」日であり、1月15日は同じく「グロをとく」日である。

11日の朝、グロがたった時からグロの中の囲炉裏では深夜まで薪が焚かれ、参内者はその間自由に「グロにゆく」ことができ、火を囲んで持参した餅などを焼いて食べることができる。門松や注連縄、お飾りなどもグロの外に積み上げられる。一日の終わりにはいったん火が消され翌日早朝には、再び世話人によって囲炉裏に点火され、深夜までグロは人々で賑わう。

14日の夜には祭壇を設けて「サイテン（祭典）」が行われ、歳徳神を送り出す儀礼を為し、神棚に供えた鏡餅を囲炉裏の火で焼いて共食する。一昔前は、翌日が成人式で祝日だったため、子供たちは年籠りにも相当する「トマリコミ」もグロで許された。

15日の朝は、世話人組総出でグロがとかれ、前日までに参内者たちが積み上げてあった正月飾りとともにグロは燃やされ、グロの行事は終了する。

2. 五十猛のグロとは

2-1. グロを担う人々

「五十猛のグロ」として知られるこの小正月行事は、日本海を舞台にした漁業を命懸けの生活手段として生きる漁師のための欠かされざる重要な年中行事であり、その責任は昨今、大浦グロ保存会にある。

大浦グロ保存会は、五十猛町大浦内の全11からなる自治会を第1組と第2組からなる二つの世話人組に区分して組織された、グロ実行委員会である。

大浦ではかつて多い時で四つのグロが競合していた時代があった。そのころはグロ保存会の必要性もなく、グロを行う実働人数は、大人も子供も十分足りていた。しかし、時代

の推移により人口減少・人口流出が顕著となり、大浦でも漁師の数が減り、子供の数が減り、従来通りにグロができなくなってきた。

そこで漁協が音頭を取り、かつては三つから四つのグループごとにそれぞれグロをたてていた大浦の漁師たちを再編成して二分し、世話人組ごとに実施責任を分担し合ってグロを続けてゆこうという目的から、大浦グロ保存会が生まれた。

筆者が訪ねた、2018年と2020年は柳町・上柳町・明神・日の出・漁民団地の第2組（2018年組頭：辻俊幸、2020年組頭：三井克浩）が、2019年には上市第一・上市第二・上市第三・堅町・本町・朝日町の第1組（組頭：林範行）が、当番制で交互にグロを担当した。世話人組は、世話人組頭（当番責任者）と会計以外は重役を特に定めず、各自治会構成員男性の自主的連帯を前提として、グロの成功だけを目的として成り立ってきた組織であるといえよう。

大浦では、住人の職種による区分に、リョーシ（漁師、船で生きる人）とオカビト（非漁師、勤め人・商人・職人）の二つがあり、グロの運営はリョーシの領分である。

また、五十猛町の中でも社会地理的区分によって、互いが半ば蔑んで言い合う時の分類に、大浦部（大浦地区とその住人、^{おおらべ}ほぼリョーシ）と在郷部（大浦以外すなわち山間部とその住人、^{ざいご(う)べ}ほぼ農家）の二つがある。

グロは、元来は大浦部のリョーシによって運営・継承されてきた行事なのである。大浦グロ保存会では、その構造は踏襲しながらも新しい時代への継承を睨んで、オカビトの協力や参加を受け入れながら、小正月には欠かせないこの民俗行事を維持している。

大浦部のリョーシにとって、新年はグロで始まり、3月の龍宮祭（船玉神社）、4月の大祭（五十猛神社）を終えて、7月の夏祭りを迎えるというサイクルが毎年巡ってくる。

2-2. グロがたつまで

2-2-A. 準備

毎年、グロをたてる1月11日のおよそ2ヶ月前から、世話人組は時化の日に集会所で寄合を開いては、割り木集め、センボクサン・その他の竹・笹集め、短冊などの飾り作り、グロの中心にたつセンボクサンを埋め込む穴掘り作業等を、準備工程として行う。

集められた孟宗竹、真竹、笹は、内海辺交差点からグロがたつ船着き場近くの道路隅へ、割り木は更に海寄りのスペースに集めて積まれる。

2020年、筆者が確認したところでは、平均して全長4.6mの笹を4、5本ずつ束ねたものが90束くらいと、グロの梁に使う真竹（枝をはらったもの）は全長5～7m、太さ3.5～6.0cm程度のもをとり合わせて12本ほど用意されていた。

センボクサンとなる孟宗竹は2本、共に先端部の枝と葉は残し全長17m、太さ20cmで、

そのうちの1本は約35cmの根を残してある。ともに枝葉がついた先端部分は5m弱ある¹⁾。他地区の山林で選定、切り出し、大浦までの運搬作業は特に名称はないが「竹迎え」である。

薪やグロの囲炉裏となる割り木は、全長が50～60cm、太さが7cmくらいのものが無数に積み上げられていた。これとて世話人組総出での力仕事である。

2-2-B. グロをたてる

グロは通称「宮の下」と呼ばれる、韓神新羅神社の法面下と船着き場に挟まれた空間にたてられる²⁾。この場所に他地域における「トンド場」のような特別な呼称はない。

1月11日朝、8時開始と告知されているが、30人前後の世話人組の男性たちは早め早めに行動するリョーシ時間で軽トラや徒歩で現場に駆けつけてくる。共同で行う作業は以下の順に進められる。天候に左右されることになるが、作業は大体2時間以内に終了する。

- ① センボクサンに飾りをつけ、直立させて固定する
- ② センボクサンを中心に放射状に円を描くように柱をたて、竹の梁をわたす
- ③ 柱と柱の間に笹を縛って壁をつけ、屋根を作る
- ④ 入り口を韓神新羅神社に向けて設置し、その両側に門松をたてる。浜の砂を敷き詰め、センボクサンに正月飾りとしてボバ（ジンボウサ）を飾る
- ⑤ 囲炉裏を3カ所設置し、割り木に火を灯し、グロが完成
- ⑥ 餅つき

(1) センボクサンをたてる（挿絵1）

歳徳神（神となった祖霊）が招来される依り代としての御柱ことセンボクサン³⁾（千木、神木、真木、千鉾と表記には諸説ある）をたてる作業からグロ行事は始まる。

センボクサンには、現在は孟宗竹が用いられる。本来は大きい真竹がよしとされていたが、いまはそのような真竹を見つけること自体が困難らしい。

皆で担ぎ上げて台の上に寝かせた2本の孟宗竹を、根本と上部をしっかり縄で結び付け、飾りつけの作業が始まる。

飾りつけは、先端の枝の部分に色付きの短冊や紙テープを結び付け、その下に2本の横木（横平竹）を「串」の字のように平行に結び、その先端を割って合計4カ所にシデ（紙垂）を挟み込んで垂らす。横木は上が短く下が長いものが多い。2020年度は上が5.6m、下が6.5mであった⁴⁾が、厳格な規定はない。

飾り付けと同時にセンボクサンにロープを結び付ける作業も始まっている。

上の横木とセンボクサンが交わる十字点に7本、下の横木の十字点には5本、2019年度は計12本⁵⁾のロープがつけられた。ロープの先端は1人から複数の男性たちが持ち、それぞれ固定する場所を定め、まずは様子を見ながらロープを引きセンボクサンを起こし、根本を35cmの根がすっぽり隠れて余りある穴に挿し入れる。首尾よく直立したら、根本に砂をかけて高く盛り固定する。様々な方向からセンボクサンを支えている12本のロープは、木や係船柱に結び付けられて固定される。センボクサンが立ち上がった！

(2) 柱をたて梁をわたす（挿絵2）

センボクサンがたてられると、様々な動きが同時に行われる。まずは角材（カク）を持った人が14人、センボクサンを中心にした半径4m強の円周上に1.8mから1.9mの等間隔で立つ。カクを垂直に立たせているその地面には鉄の杭が打たれ、カクはそれに結び付けられて固定され、入り口用2本、その他12本の計14本からなる柱が立ち上がる。

いまでこそ角材が使われているが、かつて、グロの柱は松であった。門松といった。

門松の数は多ければ多いほどよかった。大きければ大きいほどよかった⁶⁾。

自分の地区のグロの柱を見栄え良くするために、他の地区の倉庫や隠し場所から盗み出してきてもよいという「門松どろぼう」という風習があった。眼鏡にかなった門松をままとせしめた子供らと、守り切れずに盗られてしまった子供らとの間には確執も生じたというが、それも含めてみな公然の門松の盗み合いを楽しみにしていたという。

この風習は、戦後の昭和22年頃、警察や学校が「盗みはいけない」と禁止してしまったために廃れてしまった⁷⁾。

センボクサンと14本の柱の間には、放射線状に竹の梁が渡され結ばれる。柱は高さが3mほどであるが、地上から約1.6mの高さで梁の竹を結んでいた。梁のもう一方はセンボクサンの地上約2.7m地点に向けて渡され放射状に結ばれてゆく。入り口の2本だけは、松をつけて門松にするためか、他より高めで約1.72mの高さで梁の竹を結んでいた。

(3) 屋根と壁を作る（挿絵3）

梁が渡された時点で、筵と呼ばれるが実際は莫藎を取り付けて屋根にする作業が始まる。かつてはわかめ干し用の筵が使われていた。現在使われる莫藎は、韓神新羅神社に保管してある備品の一つである。梁と梁の間の空間は、屋根が円錐状であるために、上頂部では狭く周縁下部では広がっている。ここに莫藎を横に長く広げて三段に並べる要領で、内側から莫藎に穴をあけビニール紐を渡して、梁の竹に縛って留めてゆく。小竹を斜めに切って尖らせた穴あけ器や、ビニール紐用の専用の針（全長17cm）など、誰もが小

刀や鎌やカッターなど作業用刃物を使って、手際よく素早く作業していた。

囲炉裏の煙を外へ逃がすため、屋根は密閉性が全くなく、雨が降ったら漏ってしまうように作られている。こうして建造物としてのグロがこの時点から機能し始める。

屋根を作る作業と同時進行で、柱と柱の間を笹の壁で塞ぐ作業も断続的に行われる。「ガワ⁸⁾の笹を縛る」という作業である。全長 4.6m の笹竹を 4～5 本ずつ束ねたものが 90 束余、ビニール紐で次から次へと縛りつけられ、瞬く間に側面の壁が出来上がる。

縛り方は、笹束を横向きにして柱 3 本分の間隔（壁 2 枚分）に対して 1 束を、下から順に地上約 1.4m の高さまで押し付けながら縛り三層に積み上げてゆく。一通り縛り終わると、鋏で剪定し、形を整えて仕上げる。

(4) 入り口（門松）を作り、ジンボウサを飾り付ける（挿絵 4）

入り口左右の 2 本を除いた他の 12 本柱は十二支を表しており、かつては恵方に向けて入り口が作られていた。しかし、北西の強風が吹く頻度の高いこの季節に適合させるように固定され、入り口は近所の韓神新羅神社を向いて作られるようになっていった。

入り口の 2 柱には松が結ばれて門松となる。入り口は 1.7m × 1.7m（2019 年測定）で、他の柱よりも梁を結ぶ位置が高くなっている。

正月飾りとしてボバ、ジンボウサと呼ばれているホンダワラ⁹⁾が供えられる。ボバとは水中に生育する水草・海草・藻類の総称である喪葉^{もは}の語に対応し（樫村 2018, 38）、ジンボウサはジンバソウ（神馬藻）と表記される語に対応している。古来より肥料・飾り物・食用にされてきた由緒がある。

供え方は、グロ内部のセンボクサンの高い所へ¹⁰⁾1m 位の横木（竹）を十字に結び付け、一対ないし 1 束のジンボウサ（70cm 位）を稲穂のはぜ掛けのように跨がせて設置する。

ジンボウサをつけた横木より高い位置のセンボクサンには、五十猛神社のお札がつけられることがある。お札に「奉 歳徳祭」と書かれている。ただ木下氏によれば、「このお札は最近お祓いの意味でつけている」とのことなので、ジンボウサはともかく神社のお札はもともと必要なものかも知れない。

お札もジンボウサも、入り口に向かってつけられているので、グロに入ってきた人は必ずその正面にお札とジンボウサをみることになる。

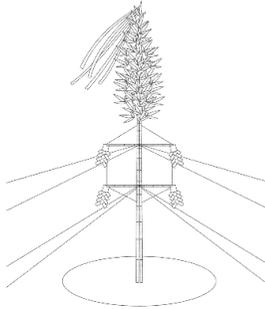
浜から砂が運ばれ、グロの内部一面に敷き詰められる。その上に入場者の利便を考慮して莫塵が敷かれる。

(5) 内装をととのえる～グロの完成（挿絵 5, 6）

グロの内部には囲炉裏が 3 カ所ほど設けられる。炉は「丁場」という呼称で、三丁場、

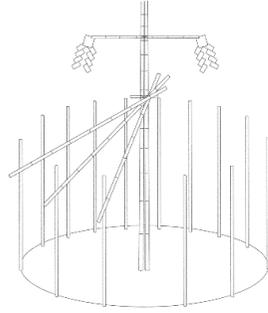
1. センボクサンをたてる

枝に短冊、横平竹に幣の飾りをつけ、力を合わせて人力でロープを引き、センボクサンをたてる。



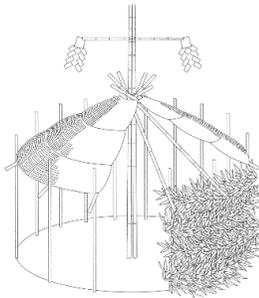
2. 柱をたて梁をわたす

14本の柱の位置を決め、杭を打って柱を縛る。センボクサンから放射状に梁竹をわたして縛る。



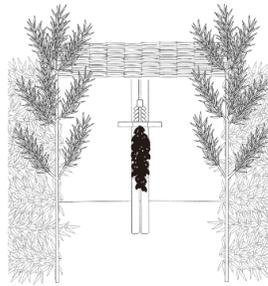
3. 屋根と壁を作る

梁竹に藁を渡して三段に縫い留め屋根を作る。笹束を三層に積み縛り、ワキと呼ばれる壁を作る。



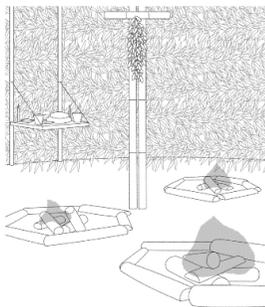
4. 門松とジンボウサをつける

入口の柱に門松をたてる。センボクサンにジンボウサ（ホンダワラ）と歳徳神の御札をつける。



5. 内装をととのえる

三ヵ所の囲炉裏（丁場）で火を焚く。14日の夜は神棚を設け、歳徳神を送る儀礼を行う。



6. グロの完成

11日から14日まで人々が訪れ、餅やスルメを焼いて食べ、大漁・無病を願う。

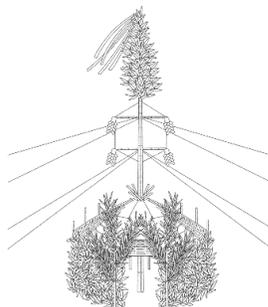




写真1 韓神新羅神社からグロ，大浦港をのぞむ（2018年）筆者撮影

四丁場という言い方をする。数に決まりはない。三丁場の場合，センボクサンの左右と後方に一つずつ設けられる。

割り木を五角形以上につなげて炉縁（カバチ）¹¹⁾とし，その内側で割り木やその他の薪材に火がつけられる。点火儀礼というものは見られない。焚かれる木材は，本来は松が一番良いのだが，松くい虫の害により昔ほど容易には松が入手できなくなったという。杉は煙が出過ぎて適さない。栗やクスギなどの入手できる木材や，場合によっては建築廃材も利用される。

丁場に火が入れられ，屋根の隙間から外へと白い煙が立ち上ると，ようやくグロは完成する。センボクサンの高さ17m余，グロの高さ3m余，奥行き9m弱，円錐形の屋根と円柱形の壁に一つの入り口を備えたグロが動き出す。

この日から解体され燃やされる15日の朝まで，グロはこの場所で人々を日夜迎え続ける。歳徳祭の札を貼り，歳徳神の依り代であるセンボクサンではあるが，公式に神主を呼んで祈祷してもらおうとかいった，いわゆる宗教的祭儀は一切行われぬのも特徴である（写真1）。

(6) 餅つき

グロが立ち上がる時間を見越して，各世話人組が拠点とする自治会館等では，餅つきの準備が進められていた。グロをたてるグループと餅つき準備をするグループの二手に分かれて作業しているのだ。グロをたてる作業が男性だけで行われるのに対して，餅つきの準備段階では女性の助力も尊重されている。

ここで搗かれる餅は、オカガミサンといって正月用の鏡餅¹²⁾と同じお供えである。

2019年1月11日に、漁協の隣に位置する魚市場と商人控室とを利用して餅つきが行われた（写真2）¹³⁾。

グロをたて終えて駆け付けてきた男性たちが数人合流して、最初の臼が搗き始められた。椿の木で作られるサスと呼ばれる長さ1.6m、直径が2.5cmから3.3cmの堅杵が8本、3本脚の石臼（幅40×高さ39cm、内部は直径32×深さ22cm）が一つ、搗き手（6～8人全員男性）、一人が相の手（返し手）を務め、手水をとりながら臼の中の餅を手返す。



写真2 餅つきの様子（2019年）筆者撮影

蒸籠で蒸かされたもち米が蒸し布巾から臼の中にあけられると、サスを持った男性陣は、まず米を先端で捏ね、やがて時計と反対の左回りに回りながら餅を搗いてゆく。

餅つき歌というものもあったらしいが、ここでは歌われなかった。祝福の墨（墨汁）を悪戯のように搗き手の顔に付けてゆく係の人が一人いる。外部の人間にも付けてくれるという話も聞いていたが、ここでは付けられなかった。

搗きあがった餅は、控室の作業場に運ばれて餅とり粉をまぶされ、のし板も兼ねた木箱の中で大きな一枚の丸餅に仕立てられる。

全部で二臼搗かれたが、二臼目は二分されて共に丸餅に丸められた。これらの餅は、この後自治会館に運ばれて安置され、最終日の14日「サイテン（祭典）の日」にグロ内に設置された神棚に祀られてから、グロの火で焼かれ、参加者との共食に用いられる。

作業が終わると、男性陣は手際よく後片付けを始める。顔の墨は「縁起物」としてすぐには拭き取ってしまわないという。それにしても、全員が漁船や市場などで働いているとはいえ、おそろしく素早く片付け終わってしまった。

実は、彼らにはのんびりしている時間はなかったのだ。11時にはバスが迎えに来て、漁民全体の新年会、フナダマサン（船玉／船霊）の祭りに行くことが恒例だからだ。

船ごとに船員が集まり、船主を中心にウタゲ、エンカイと呼ばれる宴を張る。海と船で生きる漁民の生活には欠かせない祭りが、グロをたてた後も控えていたのであった。

次ページの図1は2020年に実測したデータを元に作図したプランの一例であるが、あくまで概図であり、個々部分の寸法は毎年少しずつ変わる。デザインだけは変わらずに継承される¹⁴⁾。

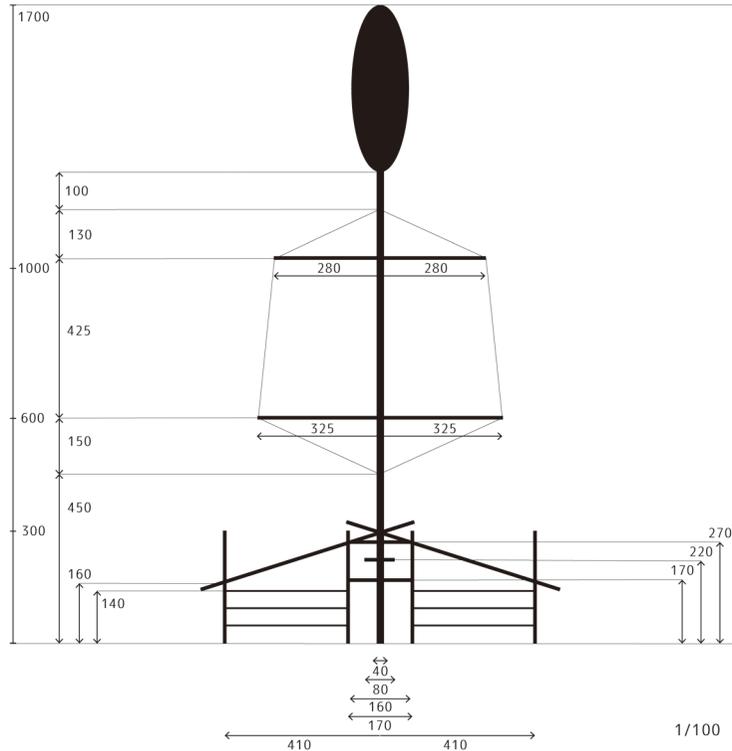


図1 グロのプラン (作図：齋藤由美子)

2-3. グロにゆく

1月11日の午前10時半から11時にかけてグロは動き始める。

華やかなオープンセレモニーや来賓に対する特別な歓迎会が開かれるわけでもなく、ウタゲに出席しなかった人々が嬉々としてしかし粛々と丁場の周りに集い、火焚きに従事する。近隣の小学校などのグロ体験も行われる。山陰地方のテレビ局数社も必ず取材に現れ、翌日には朝のニュースで報道される。グロを見下ろす韓神新羅神社を会場に、五十猛歴史研究会(代表：林 能伸)が窓口となってグロを学ぶセミナー¹⁵⁾も開かれる。

大浦地区在住者だけでなく、どこの人でも、どこの国の人でもグロに入ることはできる。丁場の火で持参した餅などを焼いて食べることや、古くなった正月飾りをグロの外に積み上げて焚き上げを託すこともできる。

ここではグロに集う人々が何をしているのか、一つの丁場の端を使わせてもらいながら眺めてみたい。

2-3-A. グロで行われること

15日の朝に焚き上げてもらう正月飾り等をグロの壁の外に置き、門松がついた入り口の莫塵をまくり上げてグロの中に入った人は、まず飛び込んでくる煙に目をこすり、鼻の奥を突かれながらも自分が使おうと決めた丁場に向かってゆく。莫塵が敷かれた場所であれば履物を脱いで、その履物を笹壁の隅（ワキ）へ置いておく。

家の門松に礼拝する人がいないのと同じことか、センボクサンに対して礼拝する人は筆者が見た限りでは認められなかった。

丁場に場所を得た人たちは、ここで何をやるのだろうか。

グロにおいては丁場の火で焼いた餅を食べることで無病息災が叶うとされている。最もよく耳にする具体的ご利益は、「一年間風邪をひかない」ということである。

グロの中で餅を直接食べなくとも、この火で焼いた餅をもって帰って何らかの事情でグロへ来られなかった家人に食べさせても家人が被るご利益は有効となる。従って、グロの丁場で焚かれる火を介して無病息災を叶える聖なる呪力が餅などの食物に宿り、それを食することで呪力が作用して御利益を享受できる仕組みが見てとれる。

グロにおいては、グロ内部で焚かれる火自体が最も重要な火の祭儀の中心にあり、他の地方のトンド焼き（仁摩町ふるさと伝承記録刊行事業編集委員会 1987, pp. 56-57）のように、仮屋自体を最終日に正月飾りなどと共に焚き上げる火¹⁶⁾には重要性を認めていない。

センボクサンを外して焚き上げられたグロの火で食べ物を焼いて食べる人は誰もいない。

(1) 餅の焼き方

グロの丁場で焼いて食べてよいものは、基本的に餅とイカ（スルメ）である。四足動物の肉などは本来焼いてはいけない。

餅を焼く場合は、各自自分の家から切ったものを持参する。三日の昼に切って乾かして保存しておいた「おかがみさん」こと鏡餅をここで焼くことになる。

「ニキの笹の枝をホイでさして」というのが、最も簡素で原初的なグロでの正しい餅の焼き方であろう。

ニキ¹⁷⁾（ネキ：そば、側、傍ら）には、グロの壁として縛られたむき出しの笹の束がある。そこから適当なサイズの枝をホグ¹⁸⁾（もぐ、むしる）と、葉をはらって竹枝串を作り、そこに餅を突き刺して火の上で炙り、焼いたのである。石村勝郎が記述しているとおり¹⁹⁾「細い竹の先に餅を突き刺して、焼いて食べる」である。

ただ、筆者が見た範囲ではその焼き方で餅を焼いている人は目に入らなかった。

総じて現在は、足がついた携帯用の焼き網を持ち込み、人数が多いときは割り木の曲が

り角を利用して橋渡しした大きめの焼き網の上に、餅やその他の食品を並べて焼いている。トングや菜箸、割り箸などを使って、調理が容易になるような準備をしてくれていた(写真3)。



写真3 丁場で餅を焼く(2018年)撮影:上原美奈子

目を凝らせば餅の焼き方はそればかりではない。子供たちの中には、テキまたはテッキ(鉄器)²⁰⁾とよばれるグロ専用の餅焼き道具を、嬉々として携えて来る姿が見られる。

テキは、長さ1m弱の細竹を柄にして、その先端から20cm弱の針金3~4本を下に垂らして円形または方形の焼き網を固定したものだ。使い方は、釣り竿のように柄をもって、先に吊るした焼き網にのせた餅を火の上にかざして焼く。熱く燃え盛る丁場の中に網をいれてじっと獲物を待つ釣り人のような姿が印象的だ。

餅の焼き方の推移は、①昔はガワの筐をちぎって餅を枝に刺して焼いた、②ついで竹と針金で作った餅焼きで焼く新式が登場した、③現在はトングと餅網を持ち込んで焼いている、と分類できそうである。

なかでも②のテキは、辻俊幸氏によれば、誰かが最初に作ってから子供が皆欲しがって憧れの餅焼き道具になったそうで、市販品などないのでみなお父さんにせがんで作ってもらっていた。お父さんにテキを作ってもらい、グロで楽しい思い出をした子供たちも、やがて成長して自分の子供の為にテキを作る番になる。筆者が見たテキで餅を焼く子供たちも、いずれ自作のテキを我が子にもたせてグロへ送り出すのだろう。

(2) 餅の食べ方

筐に刺してであれ、テキや餅網であれ、グロの丁場の火で焼いた餅は、大切に美味しく食される。

筆者が見る限りでは、この地の焼餅の食べ方として一般的な黒砂糖をつけて食べる人がほとんどであった。黒砂糖といっても粗糖(黒糖)のことで、焼けた餅の真ん中に黒糖を好みの量、或いは大粒の一かけらを直接おしつけて二つ折りにして食べるのである。

焼かれた餅の熱で黒糖が中で次第に溶けてゆき、絶妙の黒蜜餅になる。家で待つ家族の為に代表でグロに来た人もこのやり方で、焼けた餅に黒糖を挟んでは折りたたんでいた。家に着く頃が、黒糖が程よく溶けて美味しくなる食べ頃なのだそうだ。

今ではワキ・ニキの笹は餅を焼くときには使われないが、焼けた後の餅に対しては現在でも役目がある。黒糖を挟んで二つ折りにしたときに開かないように、笹の先端5cmを留め串として刺すことがあるのだ。筆者も実際にそのやり方を見せてもらって確認した。竹と笹と松でできているグロの中で、笹枝串をつけたまま甘い餅を食していると、この空間との一体感が感じられたから不思議である。食べ終えたあとの串は、楊枝に使ってもよいし、そのまま丁場に投入して燃やしてしまってもよい。

グロで火を囲んで家族や友人同士で楽しくお喋りや酒盛りに現をぬかして、凶らずも不注意から餅を焦がしてしまうこともあろう。木下氏によれば、そんな状態を「東京へ行くとる！」と表現していたらしい。なぜ東京なのか？「五十猛から汽車にのって（二駅の）大田あたりなら程よい焼き具合だろうが、東京となると焼き過ぎで食らべたものではない、という意味でしょうか」大浦最長寿の現役漁師：松尾岩市氏（96才）が後日、微笑みながら説明してくれた。

（3）餅以外に食べられるもの

グロの火で焼いた餅を食べると健康に関してご利益があるという信仰は、左義長やトンズ焼きなどと同様に、火のもつ呪術的浄化力を評価して積極的に訴えかけ、結果として自分に良き利得をもたらそうとする火祭りの根にある思想に端を発していると言える。

その媒体として、祖霊神であるトシトコサン（歳徳神）と、グロという同じ時空で共食すべきハレの日の食べ物たる餅の存在は不可欠であった。つき詰めて言えば、元来は餅だけがグロに必須な項目であり、それ以外の食べ物は副次的な選択項目にあったはずだ。

餅以外で、火で焼いて食べられるもの、食べてよいものは時代と共に移り変わってきたが、イカ（スルメ）は、その筆頭にあげられよう。大浦は漁村であり、グロ自体がこの地の漁師の祭りである環境から、イカが許されたのは合点がゆく。イカのほか干し魚など非四足動物食品も問題にはならなかった。

現在、丁場で焼かれるものとして掟破りだが許容されている食品に、ソーセージなどがある。ある時期ハムやウインナーなどのパックを、ある店が「グロ・セット」と名付けて安く売らだした。グロでの共食タブー概念を大きく打ち破ったこの新商品を子供たちは大歓迎した。それ以来、グロの丁場にソーセージの香ばしい煙と脂の弾ける音が加わったのだという。

子供たちが喜んで食べるなら、グロに行って楽しむためならソーセージくらいまでは許容しようと、大人たちは寛容に対応した。子供たちのために、ルールを変えてもよしとしたのだろう。2019年のグロでは、肉を持ち込んで焼いて食べている大人たちの姿も見られた。グロの共食ルールとして許容されるようになったのだろうか。

飲み物に関しての規定は特になく、大人は持参した缶ビールや缶チューハイ、日本酒、お茶などを適度に楽しみ、ごみは全て持ち帰る。泥酔して騒動を起こすことは通常あり得ない。子供たちはペットボトルや水筒のソフトドリンクを各自飲んでた。

(4) サイテン

グロの一日は、朝は丁場への点火から始まり、夜は丁場の消火に終わる。全て保存会の世話人が責任をもってその任を負う。11日から14日まで続いた歳徳神とのグロ内における共食空間は、14日の夜、最後の宴会をもって終了する。

サイテン（祭典）と呼ばれるその行事は、グロの内部の左手の壁に神棚を設えてお供えをおき、世話人組頭と会計の二人が代表してお参りし、供えた鏡餅を下ろして丁場の火で焼いて、参加者全員で食べ宴を張る。小正月の終了とともに、日本人古来の靈魂観に基づけば、海の彼方の楽土・常世におり、神として子孫のためにしばしばこの世を訪れる先祖の霊であるトシトコサンにお帰りいただく「神送り」の夜の行事である。

サイテンでは、神棚に餅・魚（鯛などの赤魚）・米・塩・酒を供えて、世話人会の二人が参拝する。神事には違いないが神主が役割を果たすことはない。それでも神主が来て拜んでくれることもあったという²¹⁾。サイテンの目的は歳徳神に最後の祈願をし、お帰り頂くことであろう。参拝が終わると、歳徳神（先祖の靈魂）のシンボル（五来 1979, p. 126）たる白くて丸い大きな鏡餅は、目の前の丁場の火にかけられる。餅が焼けるまでお神酒をまわして飲みながら談笑し、すでに歳徳神が象徴的に離脱した焼餅を、各自が手でちぎって食べる。名残を惜しむように、深夜まで大浦の人々が入り出し、遅くまで旧交を温め合う。

(5) グロをとく

15日は世話人組がグロに集合し、解体から焚き上げまでを行い行事を終了させる。この一連の過程を「グロをとく（解く）」と呼ぶ。

作業は朝7時半から始まって30分ほどでグロ自体の解体が終わる。壁の笹束をロープごと切って外してゆき、梁の莫塵や敷いてあった筵も撤収する。柱の角材や杭、きれいな莫塵など再利用が可能な資源は、韓神新羅神社の所定の場所にしまっておく。

センボクサンを横倒しにする緊迫した作業が終わると、割り木や笹束を積んで火をかけ、そこで正月飾りを燃やす。ここが神送りの場面なのであろうが、特別な祭儀などは全くなく、神主も必要ない。当然のことながら飾りを燃やす火は、歳徳神の聖性を有しないただの焚き上げの火だ。わざわざ来る見物人もなく、焚火が燃え盛り、笹竹の節が威勢よく破裂する音がこだまし、生木の燃えるスボツた（燻ぶつた）匂いがする（写真4）。

縁起物であるセンボクサンはここで燃やされずに、祝儀と引き換えにノウビキ（船縁の防護材）用として希望者に渡される。梁用の竹の一部も燃やされずノウビキ用として希望者に与えられる。こうしてグロ行事が全て終わると、世話人組は慰労会を催し、しばし休息期間を迎える。



写真4 グロをといて燃やす（2018年）筆者撮影

2-3-B. グロで行われてきたこと

(1) グロの昔語り

2020年12月10日、五十猛まちづくりセンター長：長尾英明氏の呼びかけに、3人の年輩の識者たちが応えて下さり、五十猛歴史会の林能伸氏は送迎の労をとってくれた。コロナ禍のこの不自由な時勢に、東京から来る質問者の為にまちづくりセンターに集まってくださったのが、木下孝二郎氏（昭和8年大浦生まれ大浦育ち、元漁師）、太田和子氏（昭和7年大浦生まれ、その後五十猛を離れ、昭和50年から再び大浦に居住）、海塚セツ氏（昭和4年大田生まれ、昭和28年結婚により大浦に居住）であった（写真5）。

三人に共通するところは、大浦に生まれて或いは住みついて物心がついた時からグロには欠かさず通っている点であり、その豊富な知識と実践経験に基づいた正確な記憶は、まさに「グロの達人」の域に達している点である。

2時間半にも及ぶ質疑応答の記録は、紙面の都合から、ここでは全て広げられないが、



写真5 左から海塚氏、太田氏、木下氏（2020年12月）筆者撮影

昔のグロの様子に関する語りからを幾つかを紹介したい。

(1)a グロの主体について

グロは昔、子供主体の行事であった。センボクサンの真竹と割り木用の松は、大人が手配した。割り木集めには2～3日を擁したが、戦時中で男手が無かった時には、女性たちが「割り木運び」も手伝った。子供は笹と柱用の松（門松）を集めた。丁度その時期は冬休みで時間があったので、子供（男児）は壁用の笹切りと笹束作りに励み、正月3日を過ぎて船から門松が下ろされると、他地区の子供たちと大きい門松の争奪合戦として公認の盗み合いを繰り広げた。

子供たちはその仕事を楽しみにしていた。グロがとかれた後、根付きのセンボクサンの真竹は家の雨どい用にすぐ売れたし、笹竹の束は大浦の中でも畑の囲いや砂防用の囲いとして金銭となるが、よく働いた分の褒美として子供はその分け前に与った。「これが嬉しくてやった！」（木下）

(1)b 「門松どろぼう」について

グロは昔、柱がみな松の木であった。その松の木は門松といって、船の正月飾りとしてたてられていたものだった。子供たちは3日の夕刻になると、競って船へ門松を取りに行った。取ってきた門松はグロの柱に使われるもので、11日にグロがたてられる日まで自分たちが所属する自治会の倉庫や個人宅に保管して隠しておいた。

門松の数は多い方がよく、大きく立派な方がよいとされていたので、その条件にあう門松を互いに盗み合うことが許されていた。自分たちのグロの名誉と威信がかかっているので、子供たち（男児）は真剣な遊びとして門松を奪い合った。盗られたら盗り返す仁義なき戦いが繰り広げられた。納屋の二階に門松をしまっておき、ベニヤを張って子供に入れないようにしても、子供たちはよりよい門松を求めて忍んできた。鍵をかけておいてもそれを壊して門松を盗った。船に積んでおいても子供たちは盗りに行った。「ドロボー！」と水をかけられたりした。盗られたら腹が立つが暴力の応酬にはならず、相手に怪我をさせることはなかったし、グロが済めば仲よく遊んでいた。みな面白いゲームとして真剣に盗み合っていた。戦後のある時期に警察と学校から禁止された。「盗みはよくない」と。（木下、太田、海塚）

(1)c 出合いの場、憩いの場

グロは昔、若い男女の公然の出合いの場でもあった。明治生まれのおじさんから聞いた話だと「(グロから)二人がすうっと消えてゆく」という。そんな光景も見過ごされずに、

語られ継がれて今に至る。盆踊りも同様に、古来より、男女の出会いの場であったという。（太田、木下）

また、漁村の主婦として子供の母親として、日常で溜まった肉体的疲労や精神的疲労を癒してくれるのがグロであったという。お母さん同士で子供の手を引いて「グロへあたり行こうや」と誘い合ってグロに通った。グロの火にあたり、お喋りに花を咲かせながら、餅やスルメを焼いて食べた。グロの中は喧嘩がなく、安全なアジールのような憩いの場であったのだ。グロへ行くと「元気になる」ということだ。（海塚）

(1) d 餅について

餅を搗いているのはすぐわかった。家の中から「よいしょ、よいしょ」の声が聞こえてきたから。その声につられて入ってきた人には酒を出して持て成した。酒をご馳走になった人は餅つきを手伝った。昔は杵で搗いた餅つきは大ごとだったのだ。

搗く時には「モチウタ」を歌った。棟上げなどの時に歌われる祝い唄だった。（木下）

29日は「ク（苦）」の音を含む日なので縁起が悪いとして「クモチは搗かん」と餅つきしない日であった。

正月の餅は師走の30日か31日に搗いた。餅を搗かないと正月が来ないという認識だった。色を着けない、白い餅だけだった。

正月過ぎると寒餅を搗いた、雛祭りにも、村祭りにも餅を搗いた。葬式の時も、法事餅といって甘くない、塩餡の餅を搗いた。

大きい餅が搗ければ自慢になった、「一升餅」といった。正月用の鏡餅は小さい二段重ねのもので、神棚・仏壇・炊事場・床の間・船などに供えた。（木下、太田、海塚）

14日の夜はグロに神主が来て拝み、焼いた餅をちぎって食べてもらう。15日の朝には、家で供えた後にとっておいた餅で「餅がゆ」を作って食べた。小豆を炊いておいてそこに米と餅を入れて作った。（海塚）

(2) グロで禁じられていること

基本的に誰にでも門戸を開くグロであるが、幾つか禁忌があることも事実である。共同体内においてある一定の条件に合致する成員は、グロに関わることを忌避されてきた。

まず産褥期間にある女性はグロには入れない。現在でも習いがあるか否かは確認できなかった。

そしてユミ（忌み）があたった家の人は、グロには入れないし、一連のグロ行事の作業にも男女を問わず加われない。喪中の家の人々は、元来一年間は神社の鳥居をくぐれず、神事に参加できず、グロ行事にも参加できなかったという。現在は49日が過ぎたらユミ

が明けたとみなされる。

「あの家はユミだ」「ユミがかかるとる」「ユミがまだあけん」という言い方をする。

木下氏の談話によれば、むかし宮の下のグロが、夜、火事になったことがあり、ユミがかかった家の子供が入ったからだ、とされたという。

また辻俊幸氏の家は、2018年の時、まさにユミにあたっていたために、俊幸氏は10年間務めてきた組頭の任務が果たせず、世話人を他の人に代わってもらった。グロをたてる時もとく時も、現場には来られるのだが手出しができないのだ。典子夫人も同じ理由から、婦人部の一員としてグロの餅つき準備にも加われなかった。

グロをたてなかつたり、日程を変えてたてた後に、何か厄災を被ると、人々はグロを通常通りにたてなかつた自分たちを責めた。腸チフスが流行った原因も、グロをたてなかつたからだと責任を感じた。餅つきを二度やる手間を省くために、カビがつかない1月6日にグロをたてたその年が悪い年だった。人々は自分たちの都合でグロの日程を変更したことが原因だと感じた。

直接現地で誰かに尋ねることは憚られたが、慣例作法どおりグロをやらないと、もともとその年の恵方から来訪し、人々に幸福をもたらす福神と考えられた神様（トシトコサン）に崇られてしっぺ返しを食らうことを恐れてきたのではないか。

グロにまつわる様々な禁忌や超自然的厄災との具体的な因果話は、今後のテーマとして尋ね続けたい。

3. 考 察

3-1. グロの語源と意味するもの

形状からはモンゴルのゲル（家）、朝鮮半島のダルジブ（月亮屋＝月の家）、川崎・登戸のセエノカミと類似したグロであるが、ここでは言語に注目してグロの意味範囲を想定してみたい。

諸辞典におけるグロが意味するところを開くと以下ようになる。

①『島根県方言辞典』1963年、広戸惇・矢富熊一郎（編）p. 201 中

- ぐろ：(1) 石や薪など一か所に集めて積み上げたもの。出雲
(2) 石（所によっては土塊も）を一か所に集めて積み上げたもの。石見
(3) 木や薪を積んだもの。出雲
(4) 堆肥を積んだもの。出雲
(5) 田の側に灌木、笹などの密集した所。石見・大田

(6) 田の中の小丘, または開墾し残した小丘. 石見

(7) 寄り集まった一団の人. 石見

①は島根県の石見・出雲に顕著な「ぐろ」の事例を地域ごとに分類してある。なお隠岐においては「くま」が「物を集めて積み上げたもの」「石を集めて積んだもの」として対応する。まずは地元の島根県の方言をモデルに、グロは、石や木や薪などを「積んだ」もの、そして灌木・笹などの「密集した」ところ、小丘など平地に対して「盛り上がった」状態のもの、「集まった」一団の人など、を意味することが分かる。

「積んだ」「盛り上がった」は平地に対して [A]〈高くなった状態〉を、「密集した」「集まった」は単体に対して [B]〈集合した状態〉を一義的に意味している。以降、この二つのカテゴリーに照らし合わせて、方言、古語、近隣外国語に目を向けてみよう。

②『日本方言大辞典』1989年, 尚学図書 p. 789

くろ: 田や畑を区画するためのくぎり. 畔 (あぜ) [A] → 島根県の用例記述はなし²²⁾

田の横の空き地 (富山県砺波, 島根県隠岐島) [?]

ぐろ: 石, 草, 薪, わらなどを積み上げたもの. (島根県出雲) [A]

③『古語大鑑』2016年, 築島裕 (編) p. 322 中

くろ [畔・畦]: (1) 田畑の土を盛り上げて境とした部分. 畦 (あぜ). [A]

(2) 平地の盛り上がった部分. 塚 (つか). [A]

④『古典基礎語辞典』2011年, 大野晋 (編) p. 456

くろ [畔・畦]: 田と田の間に, 土を細く盛り上げてつくった境界. あぜ. [A]

日本語 kur-o 畦, タミル語 kur-amp 1. 人工的土手, 堰, 土手道. [A]

2. 水田または花畑のあぜ. 3. 境界. 朝鮮語 gor-an 畦. [A]

⑤『角川古語辞典』第2巻, 1984年, 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義 (編) p. 260

ぐろ [壠]: 小高くなった草むら. [A]

⑥『古語大辞典』1983年, 中田祝夫・和田利政・北原保雄 (編) p. 533

くろ [畔・畦]: 田と田の境. あぜ (畔) [A]

ぐろ [壠]: 平地にある小高い所. 丘. [A]

ぐろ [叢]: 草や低木の密生しているところ. [B]

⑦『時代別国語大事典 上代編』1967年, 上代語編集委員会 p. 274

くろつか: 未詳. 田のあぜなど的一部分の土が高くなったところをいうか. [A]

あるいは稲積の高く重ねられた部分をいうか. [A] [B]

クロもツカもともに土の高くなったところをいう. [A]

方言のクロ・グロもこの意味をもつ。

- ⑧『近世上方語辞典』1964年，前田勇（編）p. 361

ぐろ：草木の打茂っているところ。[B]

- ⑨『江戸時代語辞典』2008年，穎原退蔵 p. 483

ぐろ [叢・壠]：草木のこんもりと茂ったところ。[B]

- ⑩『日本国語大辞典』2001年，日本国語大辞典第二版編集委員会 p. 1112

ぐろ [壠]：(畔(くろ)の変化した語か) 小高くなっている草むら。[A]

草木のこんもり茂っているところ。[B]

- ⑪『日本語源大辞典』2005年，前田富祺（監修）p. 447

くろ [畔・畦・壠]：田と田の間の土を盛り上げたところ。あぜ。[A]

小高くなった所。[A]

- ⑫『国語語源辞典』1976年，山中襄太（著）p. 207

くろ [畔]：村山七郎氏によれば，クロ（壠，平地内の高いところ）はツングース諸語

で「山」を意味する xure と関係があるという。[A]

- ⑬『満州語辞典』2014年，川内良弘（編著）

huru：高みのところ = kuru. 鳥の背部. 手の甲. p. 576 [A]

kuru：高台（平地よりやや高い所）。p. 742 [A]

- ⑭『補訂 満州語文語辞典』2008年，福田昆之

kuru：高台. kuruken：小高い所. p. 563 [A]

huru：盛り上がった土地. 鳥の背. 手の甲. 亀の甲. 湾曲した背. p. 440 [A]

⑥『古語大辞典』は，くろ [畔・畦]：田と田の境，あぜ(畔)，ぐろ [壠]：平地にある小高い所，丘，ぐろ [叢]：草や低木の密生しているところ，を明瞭に提示している。

朝鮮半島や満州の言語にも対応するグロの祖語に漢字が充てられて，少しずつ意味が細分化され特定化されてきたのであろう。田を作る地域では畔が [A] の条件からは独特かつ顕著であるが，それ以外の地域では，⑬と⑭にもあるように，高台（平地よりやや高い所）や盛り上がった場所（土地，生物の身体部位）などが [A] + [B] の意味でグロに対応するフルやクルの語が用いられている²³⁾。

現在のグロの実像は「笹などを積み集めて高くしたもの」つまり [A] + [B] に合致する。笹であれ土であれ石であれ，集めて積んで高くしたもの，つき詰めれば「小さな山」状のものを意味する領域が，グロの語源の底辺にあると筆者には思われる。今後の更なる探求を要するが，山陰地方の農業社会と漁業社会において，山・丘のイメージが意味する範囲を更に明らかにして考察する必要性を感じる。

3-2. 史料に見えるグロの姿——左義長と飾り小屋

ここでは史料や先行研究においてグロ或いはグロに同定できると思われる記述を元に、グロの姿を覗いてみたい。

グロという記述ではないが、19世紀半ば、安政三年（1856年）正月10日の五か村寄合（宅野村・仁万村・天河内村・大国村・馬路村の村役人および重立衆による寄合）で申し合わされた事項の中に以下の記述が見え、磯竹村大浦の隣の宅野村で行われていた行事が窺える（錦織 2013, p. 100）。

- 一、佐義帖之儀は十歳以下之ものなら家内ニ而小メ太鼓たたき候儀ハ格別、大太鼓莊年もの（者）市中ニ而大勢寄合、たたき候儀は一切相止メ可申、尤かさり小屋之儀は銘々村方ニ而存意次第候へ共、たとひ右かさり小屋之儀ニ而も莊年もの寄合、大太鼓なとたたき相さわき候儀は決而致間敷事

左義長のことは、10歳以下の子どもが家内で小締太鼓を叩くことならともかく、大太鼓を壮年の者が市中で大勢集まって叩くことは一切やめるべきである。もっとも飾り小屋のことはそれぞれ村方で思いのままにやってもよいが、たとえ飾り小屋であっても壮年の者が集まり、大太鼓などを叩いて騒ぐことは決してあってはならない、と。続いて、明治3年（1870年）正月七日の村の寄合での申し渡し。

- 一、左義長之儀、一切不相成事
 - 太鼓之儀は、子供たり共、不相成事
 - 若もの町内高声歩行、不相成事
- 一、着ものハもちろん、下た（下駄）・木り（木履）等ニ至迄、けんやく相守可申事
- 一、金築氏へ年徳祭り停之事

左義長のことは一切相成らない。太鼓叩きについても子どもであろうが相成らない。若者による大声を出しての歩行も相成らない。着物は勿論、下駄・木履等に至るまで儉約を守ること。金築氏へ歳徳祭の中止について伝えること、としている。

禁止されるということは流布していたという事実がわかる。この当時の左義長といわれるハレの日は、若者たちが過度に豪華な装いで、太鼓を叩き大騒ぎして行列し、酔っ払ったりして羽目を外せる特別の日であった。（歳徳神を迎える）飾り小屋というものが作られていたことが分かる。子供たちのための飾り小屋であったが、壮年の男たちが集まって大太鼓などを叩いて騒ぐこともあった。

左義長の際に作られた飾り小屋²⁴⁾はグロに相当するものなのか、それとも周辺地域の独特な仮屋行事の舞台として、面を飾り、歳徳神を迎える施設だったのか？（仁摩町ふるさと伝承記録刊行事業編集委員会 1987, pp. 56-57）には、以下のようにある。

歳徳さんは、毎年正月の元旦に牛の寝ている方角から牛に乗って来られるが、正月の十一日にはその歳徳さんを盛大に祝ったものです。神木さん（孟宗竹）を中心に竹で飾り小屋を建てて、お正月のお供物や正月飾りを一緒にして小屋に火をつけて燃やし、その火で餅を焼いて食べるのが習わしでした。

神木さんを中心に竹で飾り小屋をたてること、その小屋に火をつけて正月飾りなどを燃やすこと、その火で餅を焼いて食べること等から判断すれば、この飾り小屋は、現在でも大田市周辺地域でセンボクサンの名で行われているトンド焼きの小屋のことであろう。

五十猛町湊地区の五十猛神社で現在も行われているセンボクサン行事について、2020年1月に自治会長の田中安夫氏に尋ねたとき、「神社の境内に（孟宗竹3本の親竹を中心に竹と菰で組まれる円錐形の小屋）センボクサンをたてて一週間おいておく。昔は子供たちが中で遊んだものだった」という証言を得たことから、飾り小屋＝センボクサンの図式が成り立つ。

これによって飾り小屋・センボクサン・グロが、名称こそ各々違えど、身を淨めて歳徳神＝祖霊を迎え、象徴的な共食を経て現世での祝福を祈願する聖空間として機能してきたことがわかる。正月の年籠りと同様、小正月の年籠り用として年神を迎える仮屋を設けて祭を行い、終了後は神送りをして仮屋を燃やす共通の図式が見いだせる。

グロという呼称の流布は文書記録からでは分からない。昭和33年刊行の報告には、「五十猛町ではカリヤとは言わないが実際に竹と藁で小屋をつくって歳徳神をまつる行事を行っている」（石田 1958, p. 9）との記述が認められるが、どうして行事、小屋の名称が欠けているのか分からない。当時県立邇摩高校教諭であった石田は、「最近はこの村では三ヶ所小屋がつくられる。餅の共食などは他と余り変わらないが大田の如く面は飾らない。焼くのは十五日の朝であるのが例である」と、明らかにグロに関する有用な情報を記しているのに、後年同じ文章が二度ほど共著本に掲載されたが、そこでは「竹と藁でグロという小屋」と改められていた。ただ掲載されている写真は、昭和35年とクレジットされており、間違いなくグロの最も古い画像記録だろう（石田 1995, p. 81）。

名称の起源や呼称の推移変遷など未だ解き明かされていないが、東石見地方の伝統的な小正月行事の一つとして飾り小屋～センボクサンの役割を継承しつつ、大浦漁民の特徴



写真6 グロの入り口と門松（2018年）撮影：上原美奈子

的な民俗文化遺産として、住民の絶え間なき努力と愛情によって現在も力強くそびえ立っているのが、誇るべき「五十猛のグロ」であると言わねばなるまい（写真6）。

おわりに

「五十猛のグロ」と関わり四年がたったが、コロナ禍による2021年のグロ非開催は、大きな節目となる気がする。過去にも天災や疫病の流行によって、開催の中断経験はあったわけだが、今回の事態を受けてどう再開するのか心配しながら見守るばかりである。

この調査研究は、中央大学政策文化総合研究所の研究プロジェクト（代表：保坂俊司）の研究費支援を受けて行われた。現地では、大田市観光協会、五十猛まちづくりセンター、漁業協同組合JFしまね五十猛出張所、大田市教育委員会の諸氏に助けていただいた。

特に辻俊幸、千賀雅之、林範行、林能伸、長尾英明、森邦雄、田中安夫、多田房明、辻勇人、三井克浩、三井昭彦そして上原美奈子、花崎雪の諸氏には、グロの概要から行事の詳細の教示、取材協力などの面で様々な厚意を賜った。松尾岩市、木下孝二郎、海塚セツ、太田和子諸氏は、古きよきグロの習俗を語り聞かせてくださった。本稿作成の最終段階で、グロの工程を挿絵で表現してくれた齋藤由美子氏に敬礼。そしてこの場で全ての方々に深く感謝したい。

紙面の都合で今回は公開できなかった貴重な記録も、機を見て文章化し発表してゆく。

もとよりこの小文で、グロの研究が終了するなど暴言を吐くつもりはないけれど、批判するに値する情報源の一つとして読んでいただければ無上の喜びである。そうして届け

られた助言と批評をもとに、何度でも振出しに戻り、ノートを新調し、再び五十猛に通ってゆく所存である。

注

- 1) 1本は全長17mで枝葉を含む先端部分が4.6m、35cmの根を付けたもう1本は全長17mで枝葉を含む先端部分が4.9mであった。2020年筆者測定。
- 2) やませ商店社長で昭和38年生まれの手賀雅之氏は、グロは「宮の下」1か所であったと証言する。昭和31年生まれの手賀幸氏と典子氏ご夫妻の小学校時代の記憶によれば、グロは大浦で3か所あったという。漁協近くの浜「馬場口」、金毘羅社裏の「金毘羅さん（柳町）」、そして「宮の下」である。昭和13年生まれの手賀徳一氏によれば、昭和25～26年頃は、グロは4か所あり、明神・堅町・本町が「明神さん」と呼ばれる韓神新羅神社の鳥居の手前にグロをたてた。上市第一・第二・第三が「馬場口」に、柳町・上柳町が「金毘羅さん（柳町）」、日の出町が後の浜こと「日の出の浜」にグロをたてたという。昭和10年生まれ（堅町出身、湊在住）の森邦雄氏もグロの数は4か所であると証言する。昭和8年生まれの木下孝二郎氏は、この4か所を認めながらも、リョーシがない「日の出」が後に金毘羅さん（柳町）に合流して、合計3か所になったと指摘する。昭和4年生まれの家塚セツ氏も嫁いできた昭和28年当時は、グロは4つあり、毎年グロは行われていたことを証言する。

グロの建立場所の推移をまとめれば、4か所：馬場口・金毘羅さん（柳町）・日の出の浜・明神さん、3か所：馬場口・金毘羅さん（柳町）・明神さん、3か所：馬場口・金毘羅さん（柳町）・宮の下、1か所：宮の下となる。

- 3) しんぼこ：一月五日の左義長（トンド）のためにこしらえる十五米もある棒で、グロと称する小屋の中央に高く立てる。そして十五日左義長の日にこれをもやす。（石見・大田（五十猛）『島根県方言辞典』p. 318
- 4) 2019年度は、上下ともほぼ同じ長さの5.8mであった。
- 5) 2020年度は計10本のロープが結びつけられた。
- 6) 森邦雄氏（昭和10年大浦生、湊在住）より2020年1月11日聴聞。
- 7) 木下孝二郎氏（昭和8年大浦生）より、2020年12月10日聴聞。
- 8) がわ：中心に対して周辺を言う。（石見・大田）『島根県方言辞典』p. 165
- 9) 学名 *Sargassum fulvellum* 馬尾藻、神馬藻の漢字があてられる。
- 10) 2019年は根本から地上1.6m、2020年は2.2mの位置であった。
- 11) かばち：かまち、隅の方、炬のふち（石見）『島根県方言辞典』p. 157
- 12) 「おかがみさん」は、語呂合わせでクモチ（苦餅）に繋がり縁起が悪いとされる12月29日を避けて、30日頃までに搗いた。丸餅大小からなる5組を搗き、神棚・仏壇・床の間・船等に供えた。正月3日の昼飯の後に、鏡餅を下ろして保存用に切って乾かしておいた。自然にカビがついてしまうから、従って正月用の餅は11日まで、ましてや14日までもたせることは不可能となるため、グロの機に改めて餅を搗くことになる。家塚セツ氏（昭和4年生まれ）より、2020年12月10日聴聞。
- 13) 2018年度は、大浦団地自治会館で餅つきが行われたが、確認が遅れて見過ごしてしまった。2020年度は、餅つき自体を行わず、餅は専門業者のものを購入してお供えにあてた。
- 14) 確認しうる最古のグロ写真（昭和34～35年頃）をみると、グロは全体的に小型で、柱数も少なく梁の角度も狭く見える。センボクサンや横平竹のデザインは共通している。（文化財保護委員会1967）

- 15) 2019年、2020年ともに午前10時から、山陰民俗学会理事：多田房明氏を講師にグロに関する基礎情報の共有と、民俗学、歴史学的考察を加えた講演が行われた。終演後は、グロの達人である木下孝二郎氏を囲み、質疑応答に興じた。主催：大浦グロ保存会、三瓶地域協育ネットワーク。
- 16) トンド焼きの際に枝などの先につけた団子や餅を焼いて食べたり、その火を聖火としてもらい火することなど。
- 17) 『島根県方言辞典』p. 513
- 18) 『島根県方言辞典』p. 621
- 19) 「大浦の韓神新羅神社の下側の浜に、11日歳徳神を祀るグロがつくられ、15日にはこわしてトンド焼きをする。グロは松の枝、むしろでつくった円すい形の小屋で、内部が十畳ほどの広さ、小屋の中央には高さ10メートルほどの大竹を神木(せんぼく)として立てる。小屋の中では子どもや大人がたき火をして、細い竹の先に餅を突き刺して、焼いて食べる。グロの餅を食べるとカゼを引かないし、中風にかからぬという。グロの行事にそっくりの風習が、南朝鮮の釜山でも行われている」(石村1987, p. 61)。
- 20) 『島根県方言辞典』p. 443
- 21) 海塚セツ氏(昭和4年生)より、2020年12月10日聴聞。
- 22) あぜ(畔)：あで、あらあぜ、おね、けた、さいみ、さえめ。『島根県方言辞典』p. 3
- 23) 『日本語トルコ語辞典』2000年、竹内和夫では、ウラル・アルタイ語族のトルコ語では、「古墳」をクルガン kurgan (p. 387)、石積みの塚をクル kuru (pp. 284-5) としている。
ロシア語自体はインド・ヨーロッパ語族ではあるが、中部ロシアではなく東方のステップ地域タタル系の言葉からの借用語としてロシア語に定着した、クルガン kurgan 古墳・塚・小山(『露和辞典』1988年、ザルービン/ロジェーツキン(訳：安井亮) p. 303)がある。同じく「山」を意味するガラー gara があるが、その語源についてはいま言及できない。
- 24) 表④「正月仮屋行事で行われていたこども神楽(*宅野以外で)」(錦織109)参照。

参考資料・引用文献目録

- 石田隆義(1958)石見のとんどについて『季刊山陰民俗』第17号、山陰民俗学会、pp. 7-9。
——(1995)石見東部地区の正月行事『山陰民俗叢書7年中行事』山陰民俗学会(代表：石塚尊俊) pp. 81-81(グロの写真あり p. 81)。
- 石塚尊俊(1974)十一年中行事『日本の民俗 島根』第一法規出版(グロの写真あり p. 255)。
- 石村勝郎(1976)(昭和51年)グロ『石見出雲 幻の神話』大田市石見発行所、pp. 209-211(グロの写真あり p. 206)。
——(1987)(昭和62年)五十猛町のグロ、大田・邇摩地方のくらしと行事、『大田、仁摩、温泉津地方に伝わる味と産物収録集』大田市つきはし印刷、p. 67。
- 五十猛歴史研究会(2016)『神々が上陸した地! 五十猛町ふるさとの神話』パンフレット、五十猛神話の会。
- 大田市(1968)(昭和43年)『大田市誌15年のあゆみ』p. 655。
- 笠井賢紀(2019)『栗東市の左義長からみる地域社会』別冊淡海文庫26、サンライズ出版。
- 樫村賢二(2011)『里海と弓浜半島の暮らし—中海における肥料藻と採集用具—』鳥取県史ブックレット9、鳥取県立公文書館 県史編さん室。
- 川崎市市民ミュージアム(1988)(3)正月の火祭り、(4)川崎のセエノカミ、(5)多摩川上流域の火祭り、『川崎の民俗—水と共同体〈村の水〉』pp. 19-35。
- 五来重(1979)『続仏教と民俗』角川選書-99、角川書店。

- 鳥根県方言学会（1963）『鳥根県方言辞典』 広戸惇・矢富熊一郎（編）。
- 白石昭臣（2005）『竹の民俗誌』 大賀書房， p. 8（グロの写真あり p. 80）。
- 多田房明（1993）温泉津地域の年中行事(1)，『郷土石見』 第 34 号， pp. 64-72。 石見郷土研究懇話会。
- 天理大学附属天理参考館（2006）小正月のとんど一年神を送る火—『教祖百二十年祭り特別展 火のめぐみ』 pp. 32-33。
- 鳥取県（2010）『子どもと地域社会—鳥取の民俗再発見—』 鳥取県史ブックレット 6， 鳥取県立公文書館 県史編さん室。
- 鳥取県教育委員会（2012）『弓浜半島のトンド』 調査報告書』（鳥根県文化財報告書第 20 集）。
- 長尾英明（2020a）五十猛のグロ， おさらい五十猛物語第 73 話『五十猛地区社協だより』 199（2020. 9.17）， 五十猛地区社会福祉協議会， p. 2。
- （2020b）グロの起源， おさらい五十猛物語第 74 話『五十猛地区社協だより』 200（2020.10.22）， 五十猛地区社会福祉協議会， p. 2。
- （2020c）五十猛のグロ， おさらい五十猛物語第 75 話『五十猛地区社協だより』 201（2020. 11.19）， 五十猛地区社会福祉協議会， p. 2。
- 錦織稔之（2013）石東の神楽に特有な出雲神楽の影響と正月子ども神楽—宅野における神楽と正月仮屋行事の分析から—『石見神楽の創造性に関する研究』 鳥根県古代文化センター， pp. 87-114。
- 仁摩町ふるさと伝承記録刊行事業編集委員会（1987）歳徳神祭りと仕事始め『かたりつぎ—仁摩町ふるさと伝承記録—』 pp. 56-57。
- 林正幸（1992）正月行事「グロ」について，『五十猛今昔』 自費出版， 五十猛まちづくりセンター図書室所蔵， pp. 38-39。
- （1998）グロ行事の始まりと呼び名，『五十猛の歴史と民話』 自費出版， 五十猛まちづくりセンター図書室所蔵， pp. 10-12。
- （1999）『五十猛町の方言』， 自費出版， 五十猛まちづくりセンター図書室所蔵。
- 文化財保護委員会（1967）『正月の行事 2 鳥根県・岡山県』 平凡社， 図 64-66。
- 山岡栄一（1963）漁村の社会経済史的研究—大森銀山領大浦の場合—『山陰文化研究紀要』 第 4 号， 鳥根大学， pp. 1-34。